創刊時の思い出

榊原 雅直（高31回）

今年で在京飯田高校同窓会誌『稲穂』は20周年を迎えた。創刊号から編集に携わった身としては大変喜ばしいことではあるが、その道のり（特に創生期）は楽しいことばかりではなかった。その思い出を振り返り喜怒哀楽を紹介していきたいと思う。

創刊時の『稲穂』

２００４年秋、新宿のとある食堂の宴会場。畳の上に「それ」はうず高く積まれていた。真新しい包み紙を破り中を開くと「それ」は胎児が世の中に生を受けるが如く出現した。在京同窓会誌『稲穂』が産声を上げた瞬間であった。その場に居合わせた同窓会の役員、編集委員たちは、おのおの「それ」を読み始め互いに感想を述べあっていた。通り一遍の同窓会誌とは全く異なり、何かものすごいものが完成した実感がその場に漂っていた。

●さかきばら・まさなお
伊賀良出身。埼玉大学経済学部卒。趣味は将棋で、故大内延介九段門下で構成される、『大内棋道会』に所属。また、温泉をこよなく愛し、今夏47全都道府県の名湯・秘湯を踏破。本業は税理士。

私は創刊号から編集に携わってきているが、立ち上げメンバーには入っていない。制作する過程で金銭面の管理が必要になり、同窓会の会計担当をしていた私に声がかかったのである。創刊当時の『稲穂』はその出来栄えとは裏腹に収支面では厳しい現状に晒されていた。収入源である広告料が集まらず、反面、編集費・印刷費に加え編集会議を行う会場費も嵩み、初っ端から大きなマイナスを背負い込んでしまった。第2号からは役員の方に会議室を無償貸与頂くなどご協力を頂くことができ、その後徐々にマイナスは減っていったが、単号でプラスになるまで6年、通算の債務がなくなるまで16年を要した。

今では財務の健全化がなされ、以前の様な金銭面の苦労は解消されたが、これはひとえに協賛金及び広告料、並びにサポーター料のご厚志を賜っている皆様のお陰であり、この場をお借りして心より感謝申し上げます。

思い出の作品

『稲穂』には今まで２００を超えるエッセー、インタビュー記事、対談等の作品が掲載されたが、その中で特に印象深かったものを自分なりに紹介したい。

まず一つ目は、第2号の熊谷元一さん（中28回）のインタビュー記事である。ご本人は童歌に出てくる様なふるさとの風景を描き続けた画家であるが、当時96歳にして現役でキャンバスに向かっておられた。昭和初期、4里（約16㎞）の道を飯田中学に通った様子を滑稽に応えて頂き、長生きの秘訣はくよくよしないこととおっしゃていた。第5号では本誌の表紙も描いて頂き、黎明期の『稲穂』には大変ご尽力頂いた方であった。

次に第4号の原広司さん（高7回）のインタビュー記事で「日本の文化は谷の文化」である。ご本人は多くの有名な建物を手掛けた建築家であるが、そのベースに谷に宿る「谷力」があると述べている。これは谷の向こう側と対峙することにより得られ、伊那谷に限らず日本の多くの場所で享受できると述べている。実際私も天竜右岸の丘陵地で高校時代を過ごし、反対側の赤石山脈やその麓の町を見て育った。この文章を読ませて頂いた時からこの「谷力」を感じ勇気を頂いた様な気がする。

次に第3号の黒柳文子さん（高18回）のエッセーである。今まで意外にも高校生活を題材にした作品は少ないが、これは高校時代の思い出を臨場感いっぱいに綴っていて、自分の学生時代に照らし合わせて共感できる作品である。題名と最後の締めに「元気で変な老人に、私はなりたい」とあるのがとてもインパクトがあった。

他にも数多くの感動的な作品が掲載されたが、誌面の関係上ご紹介できないのがとても残念である。

今後の『稲穂』

紆余曲折しながらも「稲穂」は大きな節目である20周年を迎えることができた。これからも後輩の方々に引き継がれ永遠に出版されることを願っている。

第17号の特別寄稿で高柳俊男さん（法政大学教授）から『稲穂』に対して温かい（一部は厳しい）エールを賜っている。同氏からは同窓会が一体化するための様々なご提案も頂いており、たまには冒険も必要であるとご助言頂いている。是非、編集の参考にしていきたい。

今後はただ原稿を集め製本するのではなく、この同窓会誌が会員の皆様に感動や勇気を与えるものにし続けなければならないと思う。自分自身も許されるのであれば、今後もこの編集に力を注いでいきたいと思っている。